

佛書解說大辭典



大東出版社藏版

ISBN-500-00288-X

昭和11年2月20日 初版発行
昭和53年1月20日 改訂発行
昭和57年1月12日 重版発行

仏書解説大辞典 別巻 仏教経典総論

¥18,000

版權
所有

編纂者 小 野 玄 妙

発行者 岩 野 眞 雄

印刷者 西 田 明

発行所 株式会社 大東出版社

東京都文京区白山1丁目37番10号

電話 (03) 816-7607(代)

印刷所 株式会社 平文社

4384

ISBN4-500-00302-9 C3515 ¥18000E

序

佛教經典成立の過程を歴史的に説明することは、東洋學特に佛敎學上の根本問題であつて、其の解決は容易な事業では無い。私が微力短才を顧みず此の問題の研究に没頭したのは、明治三十八年「佛敎年代考」著作以來のことであつて、引き續き今日まで三十有餘年間、孜々として一日も之を廢したことはない。中途から多少に拘はらず佛敎美術の調査に指を染めたといふものの、それは寧ろ私としては傍系の補助學であり、偶々論文などを發表したといつても餘暇を利用した餘技に過ぎ無い。私は既に十何冊かの大小の述作を公にしてゐるが、それ等はいづれも隨時雜誌に發表した小稿の集録であつて、最初から組織を立てて執筆したものは殆ど無いといつて善い。

此の意味に於て本書は私として「佛敎年代考」以來、第二回目 of 著書である。自分が魂を打ち込んで永年専門に研究した成果の一部を發表するために、章節を設けて稿を起したのは、實に今回が始めである。併かし此の頃の私の實生活は、時間に餘り恵まれてゐない。資糧は集めてあつても充分推敲を加へて想を練つて筆を執る餘裕は無い。本書は昨年七月一日に稿を起して同十月一日に筆を擱いた。最初の豫定としては、第一部經典

傳譯史、第二部錄外經典考、第三部大藏經概説、第四部根本佛典論、第五部章疏撰述史を以て組織の大綱としたのであるが、紙幅の制限と時間の關係上、第三部で打ち切つて、第四第五の二部を後日に譲ることにした。之がために遺憾ながら一具の著作としては半製品たらざるを免れない、建築に喩ふれば、家は出來たが、疊建具が入らないといつた有様である。併かし兎に角第一次の研究發表としては、此の經典成立の歴史的考察に於ける消極的意見だけは、略々開陳することが出來たことになつてゐる。

本書の執筆に當つて、私は衷心から恩師高楠順次郎先生の深重なる慈恩に感謝せざるを得ない。先生が大正新修大藏經を纂刊せらるゝに丁り、私も編輯員の席末を汚して日夕先生に親炙して其の指導の下に校訂編修の業に携はつたが、是れ等の經典を近代的に科學的に整備し研究することの方法に就いて、如何に之を取扱ふべきかを會得することが出來たのは實に先生の懇篤なる指導の賜物である。殊に昭和二年中、先生の配慮により、滿一年間佛蘭西の碩學シルヴン・レヴィ博士に師事することを得たことは、私としては生涯忘れることの出來ぬ幸福であつた。本書の執筆は及ばずながら當年の兩先生の指教に暗示を得て、全藏典の歴史的解體的調査を行つたもの、總ての目録に數字を利用し互照對映して、事實の真相を摘發するに眼めたのであつた。當時レヴィ博士から課せられた經典傳譯の真相につきては、不充分ながら答案の作製が出來たことになつたのであるが、

同博士が、昨年秋突如として長逝せられたことは残念に堪へない。

本書は右様の事情の下に取り敢えず稿を成した。本問題に對する研究としては、未だその一部であつて全部ではない。加ふるに匆忙の執筆の上に、初めての試みとして多數の數字を使用して多くの表を作つた。その考査が嚴密に行届いてゐないので、定めて誤謬も尠なからぬことと思ふ。且つ當然附けなくてはならぬ索引も出來てゐない。萬事が不備のまゝである。但々私としては、本解説大辭典の完成を契機に、今日まで漫然繼續して來た傍系の佛教美術の調査を精算し、今後は主として専門の佛典研究に餘生を捧ぐる心組で、近く大正一切經索引の編纂に従事することに豫定してゐる。旁々本書に就きては邇き將來に於ていづれ機を見て修訂増補を加へ、その完璧を期する次第である。

昭和十一年二月十一日

東京市中野區千光前町の寓居に於て

小 野 玄 妙

例 言

一、本書(總論の部)は、解説の部の網格を爲すものにして、佛教典籍の根幹たる大藏經に關するものは、總べて本總論中に其の項目あり、解説十項目中の第三項は、本書の各表と互に連繋あり、幸に互照對檢せられたし。

一、本書は佛教典籍の本體たる大藏經の總論として、主として藏經全體の綜合的歴史的考查を行ひ、經典箇々の内容等につきては、其の説明を解説の部に譲りて之に觸れることを避けた。

一、經典の譯者の署名等につきては、本書の説述と解説の部の説明と違錯するものが多數ある。但し本書に記するところは、私として最近研究の結果を綜合したものであつて、舊傳の説は遠慮なく廢除してゐるからである。

一、本書の記述は、概ね説明、考證を省略して各表の數字にそれを讓つてある。例せば第一部の傳譯史の譯經表と、第二部の錄外經の各表の如き、各數字の互照に由つて、各譯經目の正否が、略々或程度までは會得し得ることになつてゐる。

一、第三部の寫本、刊本大藏の綜攬表は、現行大藏の研究には必要缺く可からざるものと認めて作製したのであつて、特に

刊本の綜攬につきては、その中、追補訂正を要するものも無いではないが、解説の部との連絡上、舊作の表を其のまゝ登載することにした。

一、本書は第四部、第五部の執筆を省略したために、經本の原典に對する考察が殆ど記してない、結論だけを述べたのではない。意に滿たないのが當然であるが、今回のところは致し方がない。併かし資糧も相當に蒐集してあり、記述の腹案も出來てゐるのであるから、遠からぬうちに更めて執筆する豫定である。

一、解説の部につきては、大正七年に某氏の發意で佛典解題の編纂を托され、その後引き續き自分の手で集めて置いた資糧を基幹としてプランを立てた。我が學界最初の専門辭書の編纂として、語の撰定其の他に對しては萬全の努力を竭したつもりであるが、尙ほ遺漏も尠なくない。

一、總論の部約一千頁、解説の部五千六十餘頁、都合約六千一百頁の大辭書が完成した。之を一頁約六百字詰の菊判の本に引き直すと、一冊三百餘頁平均として二萬五千頁八十冊になる。今更ながら善く出來上つたことゝ自から驚かざるを得ない。

一、本書の完成につきて、私としては諸方面の方々に感謝の意

を表せざるを得ないのであるが、それには先づ編纂關係として解説の部の中の各語について解説を執筆して下された二百餘名の先輩並に知友諸賢の援助に對して深厚なる謝意を表する。

一、次に内部に在つて終始直接に編纂並に校正の衝に當つて下さつた辻森要脩君、栗本俊道君、成田昌信君、塚田弘導君、赤尾光雄君、武田香龍君、大光明眞雄君、花山行健君、不破幹雄君、渡邊浩雄君、渡邊俊英君、吉水隨君其の他諸氏の多大なる努力を謝せざるを得ない。殊に辻森要脩君は私に代つて解説の部の編纂事務全部を擔任されたのである。尙ほ總論の部の諸表作製につきては、苅部一衛君、紀氏隆眞君、朝日道雄君の助力を忝ふするところ尠なくない。

一、本書の出版に關しては、社主岩野眞雄君の利害を超越した献身的盡力に對して深く敬意を表せざるを得ない。此の鉅萬の費用を要する大出版につきて斯く完成するに至るまでの經營融資の困難は、寧ろ想像以上であつたことゝ考へる。萬難を排して今日あるに至つた事は全く氏の忍苦の賜物である。

一、終に本書の刊行事務について丸山俊誠君、整版、印刷につき、兩友堂印刷所主森島金治郎君の勞作に對して一言の謝辭を述べる。本書は量に於いても、質に於いても、有數の大出

版であり難出版であつた、それを何等の故障なく完了し得たことは、實に兩君の好意の致すところである。

一、本書完成に當り、早くも索引添附の必要を力説せらるゝ方が多い。索引、補遺、並に總論の補筆は、いづれ機を見て實現したい考へである。

目錄

第一部 經典傳譯史

第一章 序 論

- 一 支那佛敎學の礎石……………一
- 二 歷代衆經目錄の檢討……………三
- 三 傳譯の史實と其の時代別……………七
- 四 支那歷代帝王年代略表……………九

第二章 傳譯以前

- 一 支那佛敎初渡の年代……………一六
- 二 後漢明帝代及び其の以前の譯經……………二三

第三章 古譯時代

- 一 概 說……………二六
- 二 後漢の譯經……………二九
 - 1 安 世 高……………三〇
 - 2 支婁迦讖……………三二
 - 3 竺 佛 朔……………三四
 - 4 支 曜……………三四

- 5 安 玄……………三五
- 6 嚴 佛 調……………三五
- 7 康 孟 詳……………三五
- 8 曇 果……………三六
- 9 竺 大 力……………三六
- 10 康 巨……………三六
- 三 魏吳の譯經……………四二
- 11 支 謙……………四三
- 12 康 僧 會……………四五
- 13 維 祇 難……………四五
- 14 竺 律 炎……………四六
- 15 白 延……………四六
- 16 曇 柯 迦 羅……………四六
- 17 康 僧 鎧……………四六
- 18 曇 無 諦……………四七
- 19 支 疆 梁 接……………四七
- 20 安 法 賢……………四七
- 21 朱 士 行……………四七
- 四 西晉の譯經……………五二
- 22 竺 法 護……………五三

23	安文惠	五五
24	帛元信	五五
25	聶承遠	五六
26	聶道真	五六
27	竺叔蘭	五六
28	無羅叉	五七
29	法炬	五七
30	法立	五七
31	帛法祖	五八
32	支法度	五八
33	疆梁婁至	五八
34	安法欽	五八
35	衛士度	五九
36	支敏度	五九
	若羅嚴	五九

第四章 舊譯時代の前期……………七〇

一	概説……………七〇
11	東晉の譯經(上)……………七四
37	帛尸梨蜜多羅……………七四
38	康法邃……………七五
39	曇摩持……………七五
40	曇摩婢……………七五
41	僧伽跋澄……………七五

42	鳩摩羅提……………七六
43	曇摩難提……………七六
44	僧伽提婆……………七七
45	竺佛念……………七九
46	竺曇無蘭……………七九
47	支施崙……………八〇
48	支道根……………八〇
49	迦留陀伽……………八〇
50	康道和……………八〇
三	東晉の譯經(下)……………八五
51	鳩摩羅什……………八五
52	弗若多羅……………八八
53	曇摩流支……………八八
54	卑摩羅叉……………八八
55	佛陀耶舍……………八八
56	曇摩耶舍……………八八
57	曇無讖……………八九
58	道泰……………九〇
59	浮陀跋摩……………九〇
60	道龍……………九〇
61	佛陀跋陀羅……………九一
62	法顯……………九一
63	法衆……………九二
64	祇多蜜……………九二

65	曇摩	九二
66	聖堅	九二
67	竺難提	九二
68	竺法力	九三
69	嵩公	九三
70	退公	九三
71	僧伽陀	九三
72	曇摩跋檀	九三
四 劉宋の譯經		
73	寶雲	一〇〇
74	曇無竭	一〇一
75	佛陀什	一〇一
76	伊葉波羅	一〇一
77	求那跋摩	一〇一
78	僧伽跋摩	一〇二
79	曇摩蜜多	一〇三
80	智嚴	一〇三
81	智猛	一〇三
82	曇學	一〇三
83	求那跋陀羅	一〇三
84	沮渠京聲	一〇四
85	功德直	一〇四
86	法眷	一〇四
87	法盛	一〇四

88	聖良耶舍	一〇五
89	慧簡	一〇五
90	吉迦夜	一〇五
91	曇曜	一〇五
92	道嚴	一〇五
93	法海	一〇六
94	翔公	一〇六
94	先公	一〇六
五 南齊の譯經		
95	曇摩伽陀耶舍	一一三
96	摩訶乘	一一三
97	僧伽跋陀羅	一一三
98	達摩摩提	一一五
99	求那毘地	一一五
100	法度	一一五
101	曇景	一一六
101	僧伽跋彌	一一六
第五章 舊譯時代の後期		
一	概説	一一七
一一	梁の譯經	一一七
102	曼荼羅仙	一一〇
103	僧伽婆羅	一一〇
104	曇摩流支	一一一

105 勒那摩提	一二一
106 菩提流支	一二二
107 佛陀扇多	一二三
108 瞿曇般若流支	一二三
109 法場	一二三
110 毘目智仙	一二三
111 月婆首那	一二四
三 陳隋の譯經	一二五
112 眞諦	一二八
113 須菩提	一二四
114 那連提黎耶舍	一二四
115 萬天懿	一二四
116 攘那跋陀羅	一二四
117 達磨流支	一二四
118 闍那耶舍	一二四
119 耶舍曇多	一二四
120 闍那曇多	一二五
121 法智	一二六
122 毘尼多流支	一二六
123 達磨笈多	一二六
124 達磨菩提	一二七
125 菩提登	一二七
第六章 新譯時代	一二二

一 概説	一二二
二 初唐の譯經	一二五
126 波羅頗迦羅蜜多羅	一二五
127 玄奘	一二六
128 那提	一二八
129 智通	一四八
130 伽梵達摩	一五〇
131 阿地瞿多	一五〇
132 阿難律木叉	一五〇
133 若那跋陀羅	一五〇
134 杜行顗	一五〇
135 地婆訶羅	一五一
136 佛陀多羅	一五一
137 佛陀波利	一五一
三 武周の譯經	一五五
138 提雲般若	一五五
139 慧智	一五五
140 實叉難陀	一五五
141 李無諂	一五六
142 彌陀山	一五六
143 阿彌眞那	一五七
144 義淨	一五七
145 菩提流志	一五八
146 懷迪	一六〇

147	般刺蜜帝	一六〇
148	智嚴	一六一
四 中唐晚唐及び五代の譯經		
149	善無畏	一六四
150	金剛智	一六五
151	阿質達霰	一六七
152	達摩戰涅槃	一六八
153	不空	一六八
154	般若	一六九
155	勿提提犀魚	一七〇
156	尸羅達摩	一七一
157	舍光	一七二
158	牟尼室利	一七二
159	戒賢	一七二
160	菩提仙	一七二
	菩提金剛	一七二
161	達摩栖那	一七二
162	若那	一七二
163	寶雲	一七三
164	滿月	一七三
165	智慧輪	一七三
166	法成	一七三
167	達摩伽那	一七三
168	金剛福壽	一七三

169	跋駄木訶	一七三
170	解脫師子	一七四
171	瞿多三藏	一七四
172	苾胤三藏	一七四
173	三昧蘇嚩羅	一七四
174	金俱吒	一七四
175	師子國三藏	一七四
五 趙宋の譯經		
176	天息災	一八〇
177	法天	一八二
178	施護	一八三
179	法賢	一八三
180	法護	一八三
181	惟淨	一八四
182	日稱	一八四
183	天吉祥	一八五
184	慧詢	一八五
185	紹德	一八六
186	智吉祥	一八六
187	金總持	一八六
188	慈賢	一八六
六 元以後の譯經		
189	拔合思巴	一九三
190	沙囉巴	一九四

191	管 主 八	一九四
192	安 藏	一九四
193	卿 嚙 銘 得 哩	一九四
194	眞 智	一九四
195	釋 智	一九五
196	智 慧	一九五
197	指 空	一九五
198	法 禪	一九五
199	智 光	一九五
200	具 生 吉 祥	一九六
201	工 布 查 布	一九六
202	阿 旺 查 什	一九六

第二部 録外經典考

第一章	序 論	一九八
-----	-----	-----

第二章	失 譯 經	二〇〇
-----	-------	-----

一 概 説	二〇〇
二 歴代失譯經目	二〇二
イ 梁僧祐出三藏記集の失譯經	二〇三
ロ 隋開皇法經等衆經目錄の失譯經	二一八
ハ 隋費長房歴代三寶紀の失譯經	二二二

ニ	隋仁壽彥棕等衆經目錄中の失譯經	二二六
ホ	唐靜泰衆經目錄中の失譯經	二二八
ヘ	唐道宣大唐內典錄の失譯經	二二八
ト	唐明佺等大周刊定衆經目錄の失譯經	二三一
チ	唐智昇等開元釋教目錄の失譯經	二三五
リ	唐圓照等貞元新定釋教目錄の失譯經	二四三
三	現行大藏經中の失譯經	二五一
四	失譯經綜攬	二五三

第三章 抄 經

一 概 説	三〇〇
二 歴代抄經目	三〇二
イ 出三藏記集の抄經	三〇三
ロ 隋開皇衆經目錄の抄經	三〇七
ハ 隋仁壽衆經目錄中の抄經	三一四
ニ 唐靜泰衆經目錄の抄經	三一四
ホ 開元釋教錄中の抄經	三二五
ヘ 貞元新定釋教目錄の抄經	三三四
三 抄經綜攬	三四三

第四章 闕 本 經

一 概 説	三六九
二 歴代闕本經目	三七一
イ 出三藏記集中の闕本經	三七二

ロ 隋仁壽衆經目錄中の闕本經	三七九
ハ 唐衆經目錄中の闕本經	三八四
ニ 武周刊定衆經目錄の闕本經	三八八
ホ 開元釋教錄中の闕本經	三九二
ヘ 貞元新定釋教目錄闕本經	四〇四
三 闕本經綜攬	四一九

第五章 偽疑經

一 概説	四四六
二 歷代疑偽經目	四四九
イ 出三藏記集の疑偽經	四五〇
ロ 隋開皇衆經目錄中の疑偽經	四五一
ハ 隋仁壽衆經目錄の疑偽經	四五三
ニ 唐衆經目錄中の疑偽經	四五六
ホ 大唐內典錄中の疑偽經	四五七
ヘ 武周刊定衆經目錄中の疑偽經	四五九
ト 開元釋教錄中の疑偽經	四六一
チ 貞元新定釋教目錄中の疑偽經	四六四
三 現存の疑偽經	四六八
四 疑偽經綜攬	四六九

第三部 大藏經概説

第一章 序論

序論	四八二
----	-----

第二章 根本佛典小考

一 囊中無一の根本佛典	四八五
二 經典製作の歴史	四八七
三 傳譯雜考	四九二

第三章 編修以前

一 概説	四九六
二 初期の譯經と寫傳	四九九
三 大藏編修以前の見存衆經目錄	五〇一
一 道安の綜理衆經目錄	五〇二
二 出三藏記集中の衆經見存目錄	五〇八

第四章 欽定大藏經上寫本時代

一 概説	五一九
二 歷代大藏經入藏目錄(寫本時代)	五二三
一 隋開皇歷代三寶紀入藏錄	五二四
二 隋仁壽衆經目錄の入藏錄	五三六
三 大唐內典錄の入藏錄	五五三
四 唐靜泰衆經目錄の入藏錄	五六一
五 大周刊定衆經目錄の入藏錄	五七五
六 開元釋教錄の入藏錄	五八八
七 大唐貞元續開元釋教錄の入藏錄	六〇九
八 貞元新定釋教目錄の入藏錄	六一二

二 續貞元釋教錄の入藏錄……………	六三七
三 寫本大藏經綜攬……………	六三九

第五章 欽定大藏經下刊本時代……………

一 概 説……………	六七四
二 歷代雕版大藏經目錄……………	六七七
1 北宋官版大藏經目錄……………	六七九
2 契丹(遼)官版大藏經目錄……………	六八九
3 北宋官版覆刻高麗版大藏經目錄……………	七〇三
4 北宋官版覆刻金版大藏經目錄……………	七二八
5 金藏改編元法寺大藏經目錄……………	七四七
6 北宋福州東禪等覺院崇寧萬壽大藏目錄……………	七八一
7 北宋福州開元寺大藏經目錄……………	八〇八
8 南宋思溪法寶資福寺大藏經目錄……………	八一二
9 南宋思溪圓覺禪院大藏經目錄……………	八三〇
10 南宋磧砂延聖院大藏經目錄……………	八四六
11 元杭州大普寧寺大藏經目錄……………	八六三
12 大普寧寺以外の元版藏經……………	八八八
13 明官版大明三藏聖教北藏目錄……………	八九三
14 清官版大清三藏聖教目錄……………	九一三
三 刊本大藏經綜攬……………	九三一

第六章 結 語……………	九八〇
--------------	-----

佛教經典總論

小野玄妙

第一部 經典傳譯史

第一章 序 論

一 支那佛教學の礎石

支那佛敎の研究は古來から旺盛を極め、ある一部類の經論を規範とする特殊の敎學に至つては精詳覆審殆ど微を究め細を竭して餘蘊なく宛然として一科の學問を形成し、各自の門戸を張つて、學界に雄飛し以て今日に及んでゐる、いはゆる三論、法相、天台、華嚴等の宗敎がそれである。是の點に於ては、往昔のその如く現在なほ盛況を呈してゐるのである。

併かし今日になつて見ると、その部分的研究は一往はそれでも善いやうなもの、近く明治の末年以來著しく進んで來た歴史的批判的檢討の結果は、夥多豐富なる新研究資料の發見と相俟つて、今や佛敎全般に對して再吟味を試みねばならぬ時期に到達してゐるのである。支那佛敎の研究亦固よりその撰に洩るる譯にはゆかぬ。それは恰も柱の腐朽した大廈高樓のやうなもので、その文木の結構は壯大であり丹朱の粧校は美麗であるにしても、やがては壊滅の悲運を免るべくもない。それには柱を根繼して一時を糊塗するといふ方法もあるかも知れぬが、結局は改造より一步進んで新規建設を餘儀なくせられざるを得ないのである。

何しろ從來の佛敎學は、凡ての經典は釋尊の眞説であるといふことを基礎條件として立説され一派の宗學が完成され來つたのである。然るに最近に

於ける各經典本文批評研究の結論は、幸か不幸かそれ等經典の總體に對して、釋尊の直説でなく釋尊當時のものでもなく、孰れも咸な遙かに後代の學者の製作に出づるものなることを證定してしまつた。さてこうなると、或は一部二部の經典を依據としてそれを佛説といふ基礎條件の下に縱横の説を説きまくつた一宗の宗學なるものは、その根底からして轉覆せざるを得ないことになる。基礎が碎くれば礎上の家屋は一たまりもなく一舉に總崩れとなる如く、現在に於ける諸宗學の運命、亦崩壊か再建かの岐路にある。

大小乘の諸經典が、佛陀釋尊の直説でなく、悉く後代の學者の撰著であるとの論證に就きては後の「根本佛典考」中に之を詳説する。何事によらず過ぎたるは猶ほ及ばざるが如しの古諺の通り、諸宗の宗學は、その出發點に於て、所謂經典なるものに對して、餘りに信賴を拂ひ過ぎてゐる。凡ての經典の初頭に如是我聞の四字が置いてあるからと云つて、悉く之を釋尊の眞説と定むる如きは、初から歴史を無視した行き方である。もつとも宗敎そのものの立場として人類化導の方便に資するためには、その基礎が假説であつても、説明が歴史を超越してゐても、立論に幾許かの牽強附會の無理があつても、眞向から信仰で押し通して行く宗敎には、餘りそれを重要な問題視する程の必要はあるまい。此の意味に於て、宗派の學問、即ち宗學なるものに於ては、不徹底なところがあつても致し方は無い。見方に由つては、寧ろ學術的に料理し檢討することが却つて間違であるとも云へぬことは無い。舊來の學問は、舊來の學問その儘で傳ふことも、亦それ自體が一種の學問である。天台學なり、法相學なり、華嚴學なりが、それ／＼支那佛敎學の一分として特殊の價值と光輝を有することは云ふまでもない。

併かし乍ら、今茲で佛教全體に對して嚴密な學術的考查を行つて公平な歴史的批評的判斷を下すことにするとすれば、當然總ての方面に向つて解剖のメスは縦横十文字に切り刻まれざるを得ない。發祥地の印度は勿論、西域支那、日本、さては南海方面に至るまで、苟しくも佛教の傳弘するところ、各地各様の佛教いづれも何等かの裁斷を受けなくてはならぬ。その中でも、最も豊富な材料と比較的確實な歴史的文献を所有する支那は、全佛教研究の中樞をなすものであると同時に、之が討究は極めて細心の用意を要し、問題の多端なるとともにその成果は一般佛教研究の規準を示すことになる。何となれば、印度の佛教にしろ、西域の佛教にしろ是れ等はいづれも支那佛教の本源を爲すものであり、且つ現に梵語、パーリ語、胡語の原本等が多少に拘はらず殘存してゐるといつても、結局その大部分は既に亡んだ佛教の殘骸であり、且つ彼等の地方には確乎たる依據とすべき其の國の歴史といふものが無い。従つて印度、西域の佛教は、支那佛教の研討の結果を俟つて、其の資糧に藉りて之を吟味し再考察を行ふに非ざれば、到底何事によらず判斷を下すことも出來ず、亦體系づけることも不可能な状態にあるのである。

さういふやうな譯であるから、佛教の研究は支那所傳の漢譯佛教を以て中心とすべきは固より云ふまでもない。ところで、支那佛教學の現状であるが、私は今、三論學、法相學といつたやうな部分的の研究については兎や角述べやうとは思はない。古典學の一部として彼等は彼等として既に古昔から一派の學問をなしてゐる。それを其の儘會得することも必要であり、亦新しい立場で見直すといふことも一種の新研究といへやう、が併かしそれ等是要するに極めて一局部の枝末の研究であつて、その結論が白と出やうが黒にならうが、大局に影響は渺ない。

私の考へでは、現在の支那佛教學は、そのやうな部分的研究を離れて、モット根本的に全體的に又綜合的に、所有文獻資料を總動員して宗派的な獨斷的な色眼鏡を捨てた至公至平至純な態度で全然白紙に向つて新なる筆を染めなくてはならぬのであらうと思ふ。家を建てるのには先づ繩墨を用ひて繩張をする、それから次に礎石を置き、柱を立て家根を覆ひ、壁を塗る。斯くして一軒の家が出来る。部分的に精攻を進めて行くのも結構には相違ないが、それ

は恰も土臺の腐つた家の壁や襖に補強工作を加へたり、上塗り裝飾を施したりするにすぎない。せめて同じ補強工作をやるとしたら礎の位置を直し柱の根柢からしてかゝらねばならぬのであるが、結局古屋の手入は殆ど新築とかわらない出費を要する、しかもその割に見榮がしない。拙劣な補強は行つたところで修繕にはならない。それと同じ意味に於て現在の支那佛教學は、既に肝心な基礎からグラ付いてゐるのであるから、之を組織的に纏めるとなると、今の古屋の譬と同様に礎石からして据へ直すなくてはならぬ。

先づその礎石の据へ直しをやる、それはどうすることかといふに、先づ第一に全漢譯經典傳譯の史實を精密に検討して支那佛教そのものの素質を明確に認識することである。そのやうなことを云ふと、或は人に依つては「今更支那に於ける經典傳譯史の研究などが何になる。既に歷代三寶紀、開元釋教錄といつたやう各當代の名徳等が精詳審議の上で録撰した歷代勅撰の經錄があるではないか、殊に智昇の開元錄の如きは可なり嚴格な慎重な勘定を行つて秋毫も餘蘊ない考查を濟せてゐる、今頃になつて生半架の考察を行つたところで果して何の收穫があらう、そんなことは無駄である」などといはるる人があるかも知れぬ。

歷代勅撰の經錄等が、經典傳譯史の研究に於て最も有力な資糧であることは申すまでもない。特に開元錄の如きは、後代大藏經編成の規範となつた目録であり、すべて現行の大藏經は、全體の組織編目、並に各經目譯人名等、悉く此の開元の勘定に由つてゐるのである。此の點に於ては正しく最高權威の目録である。斯く云ふ私なども佛教の研究に指をそめた最初の頃は、開元錄の説を以て金科玉條と心得てそれに由つて研究の方針を立てゝゐたのであつた。併かし其の後自分の見聞が弘くなるにつれて、何かにつけて疑難を懷くやうになり、やがては錄全體に對して深い信頼を置かないことにした。それも決して昨今の事ではなく、渺なくも今から遡つて二十年已上も前から、さういふ態度で此の目録を取り扱つてゐる。

開元錄に對して疑難をするといふことは、是は實に容易ならぬ重大な問題である。それは單に翻譯の紀年がどうか、譯者の事歴がかうとかいつたやうな局部的な瑣事ではない。開元錄で勘考決定した一々の經の題目の下に列